日本国民参加型ゲーム

two

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日本国民参加型ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ０９８３Ｚ

【作者名】
ｔｗｏ

【あらすじ】
平和な日本で突然始まった殺人ゲーム！！
ゲームクリアの条件は・・・〇〇〇
何人生き残れるのか？
それともゲームオーバーとなってしまうのか・・・

1

４月１日　カズヤ宅

１０：００

けたたましいアラーム音が家中に鳴り響く。

こんな早い時間でだるいが早く起きて準備をしなければ。

今日は絶対に遅れることはできない。

大学は春休み中なので、いつもは昼過ぎまで寝ている。

そんなおれだが、今日は早起きだ。

ユイとのデートの約束があるからだ！

…まあ、まだ付き合っちゃいないが…今後付き合えればいいな…と。

おれはカズヤ。

大学３年生になったばかりの２０歳。

趣味は野球。

野球サークルに所属。

バイトして遊んでの、典型的な大学生活を送っている。

今日のデート？のお相手はユイ。

大学2年生。
サークルの後輩。

綺麗な黒髪が印象的だが、おっちょこちょいで守ってやりたくなるような可愛い子だ。

…12時に渋谷かぁ、がんばるぞ！

2

４月１日　渋谷ハチ公前

１２：０３

やばい、まさかの遅刻…ぎりぎり間に合うと思ったが微妙に間に合わない…

せっかく早く起きたのに何やってんだおれは…

まだ電車の時間まで余裕があると思ってコンビニに立ち寄ったのがいけなかった…

まだ読んでない週刊誌が目につき、ついつい立ち読みし始めたら、電車に乗り遅れてしまった…

前の彼女と別れた原因がこれだ…

…全然おれ成長してないよ…

「ごめん、ごめん。ちょっとバス遅れてて、一本電車乗り遅れたちゃったよ」

…しょうもない嘘をつくところも全く直らないか…

「だいじょぶですよ。今日映画ですよね？私、久しぶりの映画です

ごい楽しみにしてたんですよ」

屈託のない笑顔がおれの心拍数を押し上げる。

…がんばるぞ！

3

４月１日　渋谷某スポーツバー

１９：１０

映画を見て、しばらくぶらぶらした後、おれはユイとスポーツバーへ向かった。

おれとユイの共通点は野球好きということ。

プロ野球が開幕し、一緒に野球を見れると思い、ここを選んだ。

「あのシーンよかったよね。思わず涙腺ゆるんだよね」

「そうですね！予告見た時からどうなるか楽しみだったんですよ。まさかの展開で最後はすごい感動的でしたよ」

今日見た映画は、ユイが前から見たいと言っていた恋愛物だった。

正直、おれはアクションのほうが好きだ。

4

ユイを落とすためにおれは好みでもない映画を見て、柄にもないことをしゃべっている。

（さて、これからどうするか…サプライズを準備しているがどのタイミングかが大事だぞ）

ガガッ、ガガガー、ガガー

急に店内の野球中継をしていた巨大スクリーンの画像が乱れた。

そして、途切れた。

ザーーーー

ザーーーー

画面は砂嵐になってしまった。

カタ、カタカタ、カタカタ、カタタタタタタタタ…

砂嵐の上に何か赤い文字が浮かび上がる。

『日本国民参加型ゲーム』

5

「日本国民参加型ゲーム？なんだこれ？」

店内の客はみんなおれと同じリアクションだ。

店のなんかのイベントか？とも思ったが、従業員の一人はリモコンのボタンをあちこち押しており、

もう一人の従業員は配線の確認をしているのを見ると店のイベントでもないことがわかった。

「おいっ、ここにも同じの出てるぞ！」

客の一人が自分の携帯を見せながら叫んだ。

おれも急いでジーンズの左ポケットから携帯を取り出す。

よほど慌てていたのか、携帯がうまく手に収まらず、携帯を落としてしまった。

床に落ちた携帯。

その画面にも…やはり…

『日本国民参加ゲーム』

砂嵐を背景に赤い字。

ユイの携帯にも同じものが…

6

「キャー!、何これ?なんなのこれ?気持ちわるい…」

見れば見るほど薄気味悪い映像だ。

砂嵐をバックによく日本のホラー映画で使われるような字体。

赤い文字からは少し血が流れているかのように見える。

その文字、言葉が砂嵐の中、震えるように小刻みに動く…

微かに消えてはまた網膜に焼き付けんとばかりに濃く浮かび上がる…

そこへ少し前に会計を済ませた常連客の一人が、ドアを叩き破る勢いで戻ってきた。

「外が大変なことになってるぞ!」

このバーは地下にあるので周りの状況はよくわからなかった。

おれは席を立ち上がり地上めがけて階段を駆け上がった。

7

地上に出たおれを待っていたのは、

『日本国民参加型ゲーム』
『日本国民参加型ゲーム』
『日本国民参加型ゲーム』
『日本国民参加型ゲーム』
……
……
……

正面のビルの巨大スクリーン、

店頭に面したハイビジョンテレビ、

道行く人々の携帯、カーナビ…

恐ろしいあの映像が辺り一面を覆い、ネオンが輝く街を不気味な雰囲気に変えている。

ジー、ジジッ、ジジッ…

雑音と共に『日本国民参加型ゲーム』の字が消えて行く…

カタ、カタカタ、カタカタ、カタ

代わりに出てきた文字は、

『一億三千万分の一が犯人』

それと…画面の右上には小さく…

『１３０，０００，０００／１３０，０００，０００』

…と…

8

ただ…、これは…、ゲーム…、です…

僕も…、何も…、しないで…、殺されるのを…、待つわけでは…、ありません…

僕は…、あなたたち…、日本国民…、全員を…、殺します…

あなたたちが…、僕を…、殺すのが…、早いか…、僕が…、日本国民を…、全滅…、させるのが…、早いか…

ちなみに…、現状を…、見ても…、わかるように…、僕は…、すでに…、日本の…、全ての…、電波を…、支配…、しています…

衛星も…、ジャック…、しました…

画面の…、右上を…、見て…、下さい…

今…、

『一億…、三千万…、分の…、一億…、三千万…』

に…、なって…、います…

僕が…、一人…、殺して…、いく度に…、分子が…、一ずつ…、減って…、いきます…

『一億…、三千万…、分の…、一…』

に…、なるまでに…、僕を…、殺すことが…、日本国民の…、皆さんの…、ゲームクリアの…、条件…、です…

逆に…、それまでに…、僕を…、殺せなければ…、ゲームオーバー…、です…

9

僕も…、日本国民…、です…

最後の…、『一』…、は…、僕が…、生きている…、ことを…、表します…

生死の…、カウントは…、衛星に…、植え付けた…、生存者…、管理…、システムにて…、行います…

僕が…、死ねば…、この…、システムは…、停止…、します…

手始めに…、皆さんが…、油断…、している…、うちに…、稼がせて…、もらいます…

映画が…、始まって…、5分以内で…、死んでしまう…、最も…、ザコキャラ…、さんたちは…、あなたたち…、ですよ…

…では…」

ドォゴゴーーーッン

ドグォゴォーン
ンゴゴーーッン

「キャー、キャー」

渋谷のあちこちで爆発が起き、爆発音と悲鳴が入り乱れる。

10

おれの目の前でも爆発が起きる。

閃光に目がくらむ。

手が触れるとヌメヌメとするこの感触、何かの生々しい塊、

目が開かなくとも自分の肌を通して伝わる現実…

…逃げる…逃げる？

…どこに？…どうやって？

爆発は至る所で続いている。

…とにかく落ち着け、落ち着け、現状を把握しないと…

なんでここにいるのか？…

何でここまで来たのか？…

誰とここに来たのか？…

…落ち着け、落ち着け…

ギュッと誰かがおれの手を握った。

「助けて！！」

11

おれは我に返った。

「ユイ！」

そうだ、おれはユイと渋谷に来ていたんだ。

今、おれのやることはユイを連れてこの地獄から逃げることだ。

「ユイ、逃げるぞ！とにかく走るんだ。あと絶対におれの手を離すな！」

爆発は収まる気配はない。

遠くの方からは火柱があがり、辺りは黒い煙が立ち込めている。

人間は将棋倒しになり、人が人の上を逃げている。

足元は血の海となり、人間だったものが辺り一面、折り重なるように散らばっている。

「ユイ、目を開けるなよ！」

おれはユイを守る！その一心だけで、無我夢中で逃げた…

12

４月１日　渋谷隣接郊外

２１：３５

どれだけ走り続けたか…

渋谷からはだいぶ離れたようだ。

周りには同じように逃げて来た人達が疲れ果てて座り込んでいる。

ユイを見ると、ユイもこれ以上走るのは限界のように見えた。

「ここまで来ればだいじょぶだろうからちょっと休もうか」

ユイは黙って頷いた。

渋谷の方角を見ると夜の空が赤くぼやけて見える。

もう爆発音は聴こえない。

代わりに救急車のサイレンの音が微妙に聞こえてくる。

「オェッ」

少し前まで、あの悪夢のような場所いたと思うと吐き気がしてきた。

ユイを見ると、ずっと黙ったまま、しゃがみ込み下を向いたままだ。

13

あれほどの惨状…

人間はあんなにも簡単にバラバラになってしまうのか…

人間からはあんなに多くの血が流れるのか…

人間の悲鳴とうめき声が頭の中で繰り返し繰り返し再生される。

きっとユイもそんな状況なのだろう。

こんな中、意外におれは平常心を保てた。

目の前で起きたことを思い出すと気持ち悪くなるが、自然と頭は冷静だった。

この方向に逃げてきたのもただやみくもに逃げてきたのではなく、

暗い方、静かな方を選びながら走ってきた。

携帯を開くと好きなグラビアアイドルが水着姿で微笑んでいる。

画面は通常に戻っていた。

ただ画面の右上には、

『１２９，２６１，５５０／１３０，０００，０００』

…１２９，２６１，５４９…１２９，２６１，５４８…１２９，２６１，５４７…

これだけはいつものおれの携帯とは違った…

14

『ウッド・ベル』

そいつの話が本当なら…これだけのことがあったのだから、本当なのか？

この画面の右上の数字が表しているものは、あの惨劇で死んだ人の数を表しているのだろうか？

すでに８０万人…？

「ほら、渋谷も大変なことになってるみたいだよ」

「あら、ほんと大変ねぇ。この辺りにいる人達は渋谷から逃げてきたのかしら」

近所の人がベランダから渋谷方面を見ながら話をしている。

渋谷があんなことになっているのに、日本人は自分のことでないと完全に他人事だ。

ただ、“渋谷も”という近所の人の言葉が気になった。

15

「すいません、今“渋谷も”と言ってましたが、他にも何かあったんですか？」

「そうよ、今いろんなとこで大変みたいよ。テレビは今みんな“同時多発テロか？”って騒いでて。

渋谷以外でも、札幌や仙台、新潟、長野、名古屋、大阪、広島、那覇と各地でテロが起きてるのよ。

『ウッド・ベル』とか名乗ってるやつが犯人らしいけど…」

ブッーー、ブッーー

急に携帯が震えた。

「あっ、またテレビ砂嵐になったわよ。また『ウッド・ベル』出てくるみたいよ」

いろいろ教えてくれた人は、そう言ってベランダから家の中に戻って行った。

おれは恐る恐る携帯を開いた。

また砂嵐だ…

そこに徐々に大きく映し出された…

『１２９，０８１，１１５／１３０，０００，０００』

16

文字が浮き上がると、またあのヘリウムを吸ったようなふざけた声が聞こえてきた。

「皆さん…、いかが…、でしたで…、しょうか…。

最初に…、１００万…、　ポイント…、くらいはと…、思い…、ましたが…、予定より…、やや…、ショート…、しました…。

今現在…、９１８，８８５名の…、死亡が…、確認…、されました…。

ご冥福を…、お祈り…、します…」

…チーン…

「初めての…、ゲーム…、ということで…、皆さん…、お疲れ…、かと…、思います…。

今日…、この後…、だけは…、何も…、しない…、ことを…、お約束…、しますので…、

今日は…、ゆっくりと…、お休み…、下さい…」

「ふざけんなよ！なんだよこれ！ゲームってなんだよ！こっちは死にそうになったんだよ！くそっ！」

「…ねぇ、…カズヤ先輩、…家に…帰りたい…」

ユイがやっとの声でボソッとつぶやいた。

17

辺りをみると、逃げてきた人達は、まだ座り込んでいる者もいるが、それぞれ重い足どりで歩き始めている。

まだ混乱している者、現実を受け入れた者…

「そうだねユイ、早く家に帰ろう。ちゃんと送っていくからね」

幸いなことに電車は止まっていたが、渋谷とは関係のない路線のバスは動いていた。

バスは非日常だったおれとユイを日常のように運んでいった。

「一人でだいじょぶ？今日一緒にいようか？」
こんな時だ、別にやらしい気持ちで言ったのではない。

ユイもおれも一人暮らしで、ユイを一人にするのは心配だった。

「…だいじょぶです。今日は本当にありがとうございました」

「ほんとにだいじょぶ？何かあったらすぐ電話してね。すぐ駆け付けるから」

おれ自身一人になるのがちょっと怖い部分があった。

ユイにおやすみを言うとおれも一人暮らしをしているアパートへ帰った。

18

４月１日　カズヤ宅

２３：３６

部屋へ入るなり、張り詰めていた緊張の糸が切れた。

ここはいつもおれが普通に過ごしている部屋だ。

漫画は読みっぱなし、服は脱ぎっぱなし…

おれは朝起きたままの布団がめくれっぱなしのベッドに倒れ込んだ。

…疲れた…

ふと携帯を見ると、着信あり、受信メールありになっている。

ユイからか？

『カズヤ大丈夫？渋谷から少し離れてるから大丈夫だと思うけど、無事ならいったん連絡ちょうだいね　母』

おれは、

『大丈夫だよ』

とだけ打ち込み、送信した。

ユイに電話しようかどうか迷ったが、今日は大変だったね、といった簡単な内容とおやすみ、だけを入力しメールだけで済ませた。

長い４月１日が目を閉じることで終わる。

ただ、目を閉じることで明日になる。

明日以降は何が起きるのか？

次の日起きたら夢だったらいいなと思いつつおれは目を閉じた。

19

４月２日　高知県　ヒデ宅

１０：５５

朝からテレビでは、昨日起きた国内９ヶ所同時多発テロの話題しかやっていない。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

幸いといっていいのか、四国ではどこも被害を受けていないが、テレビを見る限り各地かなり悲惨な状況になっている。

２００１年のアメリカの同時多発テロの時は、外国ということもあり危機感は全然わかなかった。

自分が住んでいる国で起きたら、頭がおかしくなるだろうと思っていた。

しかし今回、日本でテロが起きたが、自分がその現場に居合わせていないせいか、危機感は全くわいてこない。

むしろ、どんな感じか生で見てみたいという好奇心がわいてきた。

20

…人間ってこんなもんだよな…
とため息をついた。

テレビ画面の右上には相変わらず例の数字がカウントされている。

『１２８，３５５，６８０／１３０，０００，０００』

昨夜よりも７０万人も減っている。

カウンターは今もなお動き続けている。

この一晩でこれだけ多くの人が苦しみ亡くなっていったということだ。

そして、今この瞬間にもどこかで誰かが亡くなっているということだ。

とにかく自分でなくてよかったと思いつつ、大学のサークルへと向かった。

21

４月４日　四国全土

４：４４

いっせいに画面が消え、砂嵐になった。

カタカタ、カタッ、カタカタ

画面に文字が打ち込まれていく音だけがまだ夜明け前の静寂さの中に響く。

『シコクザイジュウノミナサン、

オハヨウゴザイマス。

イマカラ、

シンデクダサイ。

ドクガスヲマキマス。

タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノッテイマス。

…デハ…『

カタッ、カタカタ、カタ

『シコクヘン』

カタ

『四国編』

22

４月４日　高知県　ヒデ宅

５：１５

なんだか外が騒がしい。

昨日も大学のサークルの飲みで、帰って来たのは3時過ぎだった。

これじゃ、眠くても眠れない…。

あまりにも騒々しいので、ヨタヨタしながら部屋のカーテンを開けてみた。

視界に飛び込んできたのは慌てふためく人、人、人…。

車は猛スピードで、人混みの中を走り抜けていく。

「ん？なんだ？」

あまりにも異常な雰囲気だったので、急いでサンダルだけ履いて外に出てみた。

・・・・・・・

23

「すいません、毒ガスってなんのことですか？」

「あー、もう時間ないんだよ！携帯見てみろよ！いいから手、離せ！」

…携帯？

男はおれが一瞬手の力を緩めたのを見逃さずに手を振りほどいて逃げて行った。

おれは急いでポケットから携帯を出して開いてみた。

……

……

昨日まで平穏な生活を送ってきた。

3日前のテロをニュースで知った時も楽観的にしか考えていなかった。

理解するのに数秒かかった…

…やばい

初めて危機感が込み上げてきた…

24

おれはまず一番仲のいいアキオに電話をした。

アキオはまだ寝ていたが、今の状況を説明すると電話口でもアキオの酔いがさめていくのがわかった。

「ヒデ、これからどうするよ？」

「どうするって言われても、３日前のこともあるから逃げないとやばいだろ！

逃げてる人の話だと、四国から出ればだいじょぶって話だから。アキオ、おまえ車出してくれ！」

「車か…わかった。すぐ準備してヒデんとこに迎え行くよ！」

「あと、アキオの車５人乗りだよな？ハセガワとイワキ、マツナミに連絡しとくから３人も頼む！」

「了解、みんな近くだから１５分でみんな拾ってくよ！」

25

２０分後、予定より5分遅れてアキオの車がアパートの前に止まった。

ハセガワ、イワキ、マツナミももう車に乗っている。

アキオはある程度荷物を準備していたようだが、他の3人は着の身着のまま出てきたようだ。

おれも荷物という荷物はないが、携帯、充電器、現金、免許、簡単な筆記用具は持った。

あとは小さい頃から肌身離さず持ち歩いているお守りくらいだ。

「ヒデ、急げ！もう道かなり混んでるぞ！」

おれが車に乗ると車はすぐに発進した。

26

「道だいぶ混んでるよ。“毒ガス予告”から３０分くらいしか経ってないのにやっぱりみんな混乱してるよ」

「くそ！歩道通れよ！避けてくのめんどくせぇな！」

「ってか、信号意味ないね。人も車もチャリもみんな信号無視だよ。車線も関係ない感じだね」

「しょうがないでしょ。みんな自分が逃げるのに必死なんだよ」

「まあ、おれらもそのうちの一人だからね…」

車の外を見ると、３０分前の比ではない。

なかなか車もスピードが出せない。

27

人混みを掻き分けてやっとのことで交差点を曲がる。

ふと、急いで駅に向かっている人の中に知った顔が見えた。

同じサークルのタカハシだ。

普段から妙なテンションで無駄に絡んでくる奴で、正直嫌いな奴だ。

おれは一瞬目が合ったが、気付かない振りをした。

しかし、向こうは気付いていた。

人の間をぬって、おれらの車によってきた。

ドンッ、ドンッ、ドンッ

「おい、おれも乗せろよ！ドア開けろよ！おまえらだけ車で逃げん

のはずりぃぞ！早く開けろよ！おいっ！」

勢いでマツナミがドアを開けようとした。

「マツナミ開けるな！」

アキオが叫んだ。

「この車は5人乗りなんだ。あいつは乗せられない」

「えっ？でも…」

「ただでさえ5人乗ると狭いんだ。あいつが乗るスペースはないよ。

…あとおれタカハシ嫌いだし。

あいついっつもおれらの悪口隠れて言いまくってんだよ！マツナミも知ってんだろ？」

「それはそうだけど…」

28

確かにアキオが言うとおりだ。

タカハシはいつも仲のいいおれら5人組の悪口を他の人に言いまくっている。

それだけじゃない。

あいつに何か頼み事をしても一度も聞いてもらったことはない。

タカハシはそんなやつだ。

「席が開いてるならまだしも、満席の状態でタカハシを乗せるのはおれも反対だよ」

おれはアキオの意見に同調した。

アキオとおれが反対したことで、タカハシは車に乗せない、ということになった。

マツナミもハセガワもイワキもタカハシを普段からよく思ってなかったせいか納得したようだ。

アキオはタカハシを無視して、アクセルを踏んだ。

29

「おいっ、待てよ！待てって！止まれよ！」

タカハシは車の窓を必死で叩きながら追いかけてくる。

「アキオもっとはやく！」

「速くって言われても、人が邪魔でなかなかスピード出せないよ！」

車はタカハシをなかなか振り切れない。

それどころかスピードが落ちるとドアの取っ手をつかみガチャガチャやってくる。

１００メートル程そんなことを繰り返していたが、ドンッという音とともにタカハシの姿が見えなくなった。

すると、急にフロントガラスの上の方からタカハシの逆さまの頭が覗いた。

タカハシは逆さまの状態で顔をフロントガラスに押し付け、フロントガラスを叩きだした。

「わっ、なんだこいつ！やばいどうしよ！」

と言いながらアキオはハンドルを左右に切る。

タカハシも鬼のような形相で、車から振り落とされないようにしがみついている。

しかし、車が一瞬ブレーキをかけた瞬間、タカハシはおれたちから離れて行き、穴に吸い込まれるかのようにあっという間に視界から消えた…

ドンッ、ドゴゴ、ドン、ゴゴッ

シートベルトをしていたおれの身体が2回激しく上下した…

30

おれは…おれたちは何が起きたのか、みんなわかっていた。

ただ、自分たちがしてしまったことで身体が固まってしまっていた。

アキオはハンドルを両手でしっかり握ったまま、目を見開き前を凝視している。

おれは固まった身体の中で唯一動いた眼球を使って、ゆっくりとサイドミラーを見た…

仰向けでヒクヒク動いているように見える人間がミラーに映った。

その人間が微かに頭を動かすとサイドミラーごしに目が合ったような気がした。

と次の瞬間、後続の車がその人間を飲み込んでいった…

31

アキオは黙ったまま前だけを向き運転を続けている。

後部座席の3人も無言のままだ。

おれも何も話せない…

最後に見たミラー越しのタカハシのあの目が頭に焼き付いたまま離れない。

「なあ、悪くないよな…、…おれが悪いわけじゃないよな…」

アキオがたまらず口を開いた。

「だって、もう定員いっぱいだから乗れないよな?

それなのにあいつが車叩いたり、車の上によじ登ってきたり…実際あの時、もうあいつが邪魔で前も見えなくて…」

アキオは自分のことを正当化するかのように早口でまくし立てる。

32

おれも重い口を開いた。

タカハシがこうなったのはおれがアキオの意見に同調したからであり、おれにも責任がある。

ここで自分を正当化しておかないと持たないと思った。

「そうだよ！乗れないもんは乗れないんだから、それを無理矢理乗ろうとしてくるあいつが悪いんだよ！

あいつが諦めていればこんなことなんなかったんだろ？あいつのせいだよ！」

そういいつつも頭の中では、サイドミラーに映ったあのシーンが何度も何度も繰り返されている。

「とにかく今は逃げないと…」

33

６：１５

朝起きてから１時間。

もう昨日までとは違う。

『ウッド・ベル』の四国毒ガス予告だけでおれの日常が日常でなくなってしまった。

現におれが乗った車で人をひいている。

この混乱した中で、そのことを正当化してしまう自分がいる。

ただ、それよりも今は一刻も早く四国から逃げなくてはならない。

四国を車で出るには、３つのルートしかない。

１つ目は、今治から大島、伯方島などいくつかの島を通り広島に渡るルート。

２つ目は、坂出から瀬戸大橋を通り岡山に渡るルート。

３つ目は、鳴門から淡路島を通り兵庫に渡るルート。

他にフェリーなんかもあるがまず乗れないだろう。

今、高知にいるのでまずは高知道を北上する。

問題は高知道の川之江ＪＣＴだ。

川之江ＪＣＴがこの３つのルートのどこを選ぶかの分岐点となる。

34

１０：０３

「ヒデ、どうする？もうじき川之江ＪＣＴだよ。どっちに行く？」

アキオが久々に口を開いた。

こっちを向いた目は徹夜明けのように疲れ切っていた。

「そうだな、正攻法で最短距離を行くか、裏をかいて遠いほうで行くか…

あと、アキオ、運転代わるから、しばらく後ろで休んでたらいいよ」

渋滞の中、ＪＣＴ直前で車を側道に止めアキオと運転を代わった。

おれは運転を代わるのと同時に他の車がどこに向かうのかを注意深く観察した。

ここがポイント、ここを外すか当てるかで運命が変わる。

普段、遊び人の大学生だが妙に頭が働く気がした。

「鳴門で行こう」

渋滞の列に戻るとおれはなんの迷いもなくみんなに行き先を伝えた。

「…鳴門って一番遠いんじゃ…」

みんなからそんな声も上がったが、

「だいじょぶ、鳴門でだいじょぶだから」

というおれのなぜだか説得力のある言葉で一番距離のある鳴門に向かうことになった。

35

１９：１６

もうかれこれ半日以上たつ。

中身の全くない、異様に長く感じる時間だけが無駄に過ぎていく。

車のステレオから流れるニュースは『ウッド・ベル』のことだけでもう耳をふさぎたくなる状況だ。

さすがにうんざりしてスイッチを切ろうとした瞬間、カーナビの画面が赤く染まり、そこから血みどろになった文字が浮かび上がってきた。

『四時間四十四分』

「４時間４４分？４時間４４分…なんだこれ？」

血が滴り落ちる文字が頭に焼き付く。

時間が経つにつれなぜだか冴えてくるおれの脳みそが時計に目を向けさせた。

「…残り時間か」

日付が変わるまでの時間…

日付が変わると何が起きるのか？

毒ガスがまかれるのか？

しばらくするとカーナビにまた別の数字が浮かび上がってきた。

『候補者２５５６２８５名』

ここでもおれの脳みそは瞬時に候補者の意味を理解した。

「…四国内に残ってる人数か。候補者…」

候補者という言葉が何かひっかかる。

なんの候補者なのか。

ただ、今は言葉の意味を直感で捕らえられるほど感覚が研ぎ澄まされていた。

36

２３：１６

『四十四分四十四秒』

カーナビの数字がゆっくりと血が流れるように書き換えられた。

よく『四』は『死』だから縁起が悪い数字だとされてきた。

たしかにこの状況でこれだけの四を並べられるとそれを実感するのは容易だ。

『候補者２１３９９５２名』

カーナビに浮き上がる数字と候補者という言葉の意味を考えている間に、鳴門大橋まであと数キロの所まで来ていた。

「鳴門大橋だ、もうちょっと、もうちょっとで鳴門大橋だよ。間に合う、間に合うよ！」

アキオが視界に飛び込んできた鳴門大橋を見て叫んだ。

37

ハセガワ、イワキ、マツナミの後部座席の三人も前に体を乗り出し、アキオを急かしている。

アキオと交互に運転をしてきたおれだったが、ここ2、3時間は助手席でずっと頭をフル稼動させていた。

「候補者……タスカルホウホウ…」

ウッド・ベルの言葉が気になる。

『タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノッテイマス』

たしかこう言っていたはずだ。

逃げることが、全てではない…

ゲーム…

候補者…

38

２３：２５

「くそっ！さっきから全然進まねぇよ」

考え込んでいたおれは、アキオの苛立った声で我に返った。

ふと外を見ると鳴門大橋は１０分前とほとんど同じ位置に見えた。

ここ１０分でほとんど進んでいないようだ。

外を歩いている人にどんどん抜かされて行く。

「ねぇ、これ進まないのって前の方の人達が車乗り捨ててってるからじゃない？」

マツナミの言葉通り、車を降りてみると前も後ろも至る所で車から人が出てきていた。

「ちくしょう！車捨てろってことか！？くそっ！」

39

アキオが悔しがるのもよくわかる。

この車はアキオがずっと欲しがっていた車で先月やっと手に入れたものだった。

しかし、状況が状況なのでアキオもすぐに観念した。

おれらは車をその場に乗り捨て、鳴門大橋へと向かう列に合流した。

車を捨て、うなだれているアキオにマツナミが付き添って歩く。

そんな姿を視界の隅に置きながら、おれは頭の中で反復していた。

…逃げることが全てではない…

…ゲームに参加できることを祈っている…

「よかった、間に合った～、鳴門大橋に着いたよ～。早く渡ろう！」

イワキの声が聞こえ、おれはふと時計を見た。

「…２３時３５分かぁ」

40

２３：５５

『四分四十四秒』

『候補者２０６７０５５名』

そろそろと思い、携帯を開くと画面にはそう表示されていた。

「おい、ヒデ。ホントにおまえを信じていいんだろうな？もし違ってたらおれら…」

目の前を大慌てで通り過ぎ、橋を渡って行く人達を見つめながらアキオが聞いてきた。

２３時３５分に鳴門大橋に着いたおれらは、人の波に流されるように橋へと足を踏み入れようとしていた。

アキオもハセガワもイワキもマツナミも安堵の表情を浮かべていた。

同じように必死で逃げてきた周囲の人達の顔も心なしか明るく見える。

41

「アキオ、ハセガワ、イワキ、マツナミ。おれを信じてくれるか？」

押し寄せる人の流れの中、おれは４人を呼び止めた。

おれの頭の中は鳴門の大渦のようにウッド・ベルの言葉が渦巻いていた。

この昨日までとは違う世界に危機感を感じながらも同時に好奇心もわいてきている。

頭は幸いにもかつてないほど冴えている。

「逃げないほうに賭けてみないか？」

おれは冷静な口調で言ったが、家から逃げる時に持ち出したお守りをポケットの中でぎゅっと握りしめていた。

結局、おれの予想外の問いを受け入れてくれたのはアキオとマツナミ。

ハセガワとイワキは猛反対し、橋を渡るほうを選んだ。

「大丈夫…、大丈夫だ。…おそらくこっちが正解なはず」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0983z/

日本国民参加型ゲーム

2011年12月17日09時48分発行